



THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教110~120周年
標語

共に生きる
いのちの天幕を
広げよう

1963年9月20日 第3種郵便物認可 (毎月一日発行)

2021年7月1日 (木) 第807号

発行所 福音新聞社 (1部100円)
〒169-0051東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人/ 趙永哲・編集人/ 金柄鎬

印刷所 青丘文化社

青年主日
説教

主の御言葉を守る道

<詩編119:9>

洪雄杓 牧師 (北上ベテル伝道所)



少し前のことであるが、一度も国会議員をしたことのない30代の青年が野党の党代表に選ばれたというニュースが韓国で大きな話題となった。

私たちの信仰の中心にも30代の若いイエスがいる。多くの人たちが彼を「先生」と呼び従った。彼の口から出る言葉の一つ一つは、当時の人々にとって衝撃的なものであった。彼はあらゆる問題の形式や外観よりは内容や内側に関心を示した。そして彼はそれまで行われてきたあらゆる形態の祭儀と律法を何故守るべきなのかについて説明した。

「私が来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」(マタイ5:17) こうした理由で、イエスはユダヤ人にとってタブーとされていたことも躊躇なく行った。安息日に働いたし、貧しい者や身分の低い者と共に飲み食いした。また神殿を壊すとも言った。

暗黒期のような中世の時代に、地球が太陽の周りを回っているという啓示を受けた「ジョルダノ・ブルーノ」は、地球の公転が「神から受けた啓示だ」と主張したが、結局宗教裁判で有罪となり、高温に熱せられた杭を打たれて死んだ。

今の私たちの常識では至極当然な科学的事実であるが、当時は神を冒瀆したという理由で死刑に処せられた。何故だろうか。無知だからである。当時の人々がこの科学的事実を知っていたなら、この罪状によって死刑になることはなかっただろう。

しかし、現代においても同じようなことは起きている。

「何故神によって創造された世界で地球が太陽の周りを回ってはいけないのか？」

「何故神によって創造された世界ですべての生物は時間と環境によって変わってはいけないのか？」

むしろこのような世界を神が創造したということに感嘆すべきではないだろうか。今日の教会は形式と凝り固まった意識に囚われ、教会の本当の意味を見失っているように思える。「見た目は敬虔であっても、敬虔の力を否定するようになります。こういう人々を避けなさい。」(第2テモテ3:5)

自分の歩みを顧み、イエスの教えに従って生きようと努めてもそれは決して簡単なことではない。それが信仰の道である。しかし教会はそれどころか過去の虚栄と欲望にとらわれ、それを維持しようとする。そのような教会に希望はないだろう。若いイエスの教えを受け入れるべきである。そのために智慧を求めべきである。

私たちには信仰と共に智慧が必要である。その智慧はどこから得られるのだろうか。ダニエル書にひとつの答えがある。ダニエルは次のように賛美した。「神の名が代々としえにたたえられますように。知恵と力は神のもの。」(ダニエル2:20)

人から智慧を得ることができても、それはあくまでも部分的なもので完全ではない。完全なものとはただ主のみ存在する。

イエスは自分のことを「善い先生」と呼ぶ人に向かって言った。「なぜ私を『善い』と言うのか。神おひとりのほかに善い者は誰もいない。」(マルコ10:18)

人々はどこから始まったのかも分からない「らしさ」を強要してきた。「女性らしさ」、「男性らしさ」、「学生らしさ」、「大人らしさ」など、数多くの「らしさ」はまるでそう決まっているかのように認識されてきた。そういった「らしさ」は果たして本当にそう定義できるのだろうか。考えてみる必要があるだろう。

青年主日を前にして思うことは、私たちが青年たちにこの「らしさ」を強要してはいないだろうか、という問いである。神さえも規定していないことを人間である私たちが規定してはいないだろうか。出来上がった考えのフレームにすべてを納めようとするのは、すべての結果を自分でコントロールしようとしているように思える。

「実を結ぶ生き方をしなさい」と教会で言われるが、その実誰の力によって結ぶのか。教会は自力で実を結ぶように言うてはいないだろうか。イエスは言う。「神の内にとどまり、御言葉に従って生きるなら、神によって実を結ぶ」と。

「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。」(ヨハネ15:5) ただイエスにつながっているようにと言われている。イエスにつながるとは、すなわち神につながることである。だとすれば、私たちがすべきは神につながり続けることである。そうするためには何をすれば良いのだろうか。神を知り、神を感じることである。

聖書を学び理解するのは、理解することが目的なのではなく、理解を通して神を感じるためである。別の表現をするならば、母の胸に抱かれた赤ん坊のように神の内にとどまるのである。そうしていく中で自分がすべきことが自ずと見えてくる。どう生きるべきかを知るのである。それは幼い頃は理解できなかった親の愛情を、年を取り親と同じ経験を重ねていく中で、徐々に理解していくのと似ている。それはごく自然なプロセスである。自分がどう生きるべきかを明確に知ったならば、その通りに生きようと努力するはずである。どう生きるべきかを知っているのにそうしないのは間違った生き方である。そのような生き方についてコヘレトの言葉の記者は次のように言っている。「若者よ、あなたの若さを喜べ。若き日にあなたの心を楽しませよ。心に適う道をあなたの目に映るとおりに歩め。だが、これらすべてについて神があなたを裁かれると知っておけ。」(コヘレト11:9)

主がおられることを心で信じ、生き方で示していこうとする青年の姿が私たちの姿であることを願う。

青年主日特集

青年会全国協議会からの報告

1. 前半期・2020年度全協旗揚げ(2020.9.26～)

新型コロナウイルスへの攻防から早半年、昨年9月末に開かれた青年会全国協議会(全協)の総会。主に導かれた6人での奉仕は、人との接触を避けるがために多くの制限の中で行われた。なによりコロナの問題で人間関係が希薄になりつつある今「主にあって一つとなる」を目標に掲げ、今年度の奉仕を決めた。

役員間では幾度にも及ぶオンライン会議を通し、「非接触型奉仕」を軸に、主の導きを祈りながら多方面での奉仕を始めた。非接触型奉仕を占める大きな部分の1つとしては、SNS上でのオンライン奉仕であった。青年たちを対象にした教会、クリスチャンの信仰生活などのコンテンツを中心としたオンライン雑誌『インヘリタンス』の発行。さらに全協の奉仕は、私たちが発信するだけではなく、相手から学ぶ貴重な機会を得ることが出来た。長期に及ぶ青年たちへの信仰生活に関するインタビューなどから、奉仕対象者から学ぶ機会を設け、青年たちとの交流を深めた。それだけではなく、このようなオンライン上の交流を深めたことで、青年の中にはコロナ禍「だからこそ」

決して揺るがず、烈火の如く燃える信仰継承を手にした兄弟姉妹もいた。2020年度全協の奉仕・前半期としては、コロナ禍という中でも、当初掲げた目標以上の奉仕が出来たという点では逆境だからこそ主の導きを全身で味合うことができた。

2. 後半期・活発な基盤形成に成功した全協(2021.4～)

以上、上記の様な奉仕が出来たことにはまず何よりも、イエス様の愛と赦しによるものだと考える。そして人間の接触が危ぶまれる中でも、今後の活動のため、第1回目の役員会議場所(2020年11月)を快く提供して下さった豊橋教会(鄭守煥 牧師)には多大なる感謝しかない。

今後の状況としてはまだコロナの状況により変動することとなる。しかし全協役員は今まで以上に心一つにし、主から離れない奉仕を継続していく考えである。逆境に生きる今だからこそ、クリスチャンとして一番大切な原点に戻る奉仕を考え、牧師とのインタビュー、役員間奉仕(全協会議風景、祈祷風景)、さらに状況が好転した際には改めて修養会を開き、多くの青年たちと共に信仰拡大を目指したいと思う。今後とも若い青年たちが少しでも早く「心」でイエス様に会えることを共に祈って頂ければと願っている。全協の奉仕を通し、主イエス・キリストの栄光が現れますよう、御名だけが崇められますように。

(総務：柳町聡、横浜教会)

全協OBに聞く

※8月号にも続きます。

忘れ難い青年会全協の思い出

日本キリスト教協議会総幹事 金 性 済

一



73年8月、二番目の父の葬儀後、失意の中、東京に戻った私を、先輩青年KG(後に長老)は雑誌記者の取材面談に連れまわす。KGは、その年8月、東京で拉致された金大中氏のボディガード。それまで何も知らなかった韓国についての私の学びが始まる。日本社会で幼い頃から閉ざされてきた自分の世界が韓国キリスト者の民主化闘争との出会いを通して大きく広がる。その年12月、東京教会での合同聖誕節礼拝後の弁論大会で、準備した「信仰と民族の解放」原稿の留学生に訳してもらった韓国語訳を丸暗記し、拍手大喝采で優勝。その直後、翌月曜からの青年会全協の韓国拘束キリスト者の解放を求める断食闘争(銀座数寄屋橋公園)決行を発表するや、会場は信徒たちによる野次怒号。呉允台牧師に鬼のような顔で叱りつけられる。教会から破門処分を受けた気持ち。公園で寝泊まりするテントを張り終わった夕刻、呉牧師が現場に来られる。「すぐに撤収せよ!」の言葉を、固唾をのんで覚悟。呉牧師は、青年たちの頭をこぶして小突き回したが、次の瞬間、両腕で青年たちを包むように祈ってくださった。あのとき私は、「モクサナム」という存在を深く心に刻まれていたのだ。

二

在日大韓基督教会宣教70周年の記念式典準備委員会に青年会全協代表として出席。「青年たちはこの式典を他人事のように考えず、青年らしいプログラムをもって参加しないといかん!」そう、実行委員長から威圧的な忠告。当時神学生の自分は、働き疲れた教会青年たちを口説きながら、繰り返し演劇の練習を重ねる。

ついに記念式典の当日。第一部プログラムが時間超過。青年会全協演劇プログラム取りやめ決定。広い会場から、人々はレセプション会場に移動。取り残された青年に同情するごく数名の人々の前で、青年たちは練習を重ねた演劇を、目に涙をにじませやり遂げる。

その後の総会の席上で、私はマイクを握り、力の限りの声を張り上げ、「教会青年とは何者か!」と総会を批判。総代はだれ一人反論せず、しばらくの沈黙の後、実行委員長の謝罪の言葉。

三

私はそのように道を導かれ、青年育成を今度は自分が問われる牧師への道を整えられたのだと振り返る。

全協から新たな教会生活

大阪教会 金 秀 男



1968年、在日大韓基督教会は宣教60周年を迎え、「キリストにしたがってこの世へ」を掲げようやく歴史的、社会的責任を宣教課題とする方向性は示されたが、台頭した在日二世からの一世指導者や教会の在り方への批判とはかみ合わず的確に回答できずにいた。

そのような時期、全協で代表委員のリコール運動がおこり、混乱状態にある時に全協の仲間から呼び戻され、一時離れていた青年会活動に再び加わることとなった。

そのうちいつの間にか代表委員を務める羽目に至ったが、正直自信はなかった。自分は一体何者なのかと言う問いに苦闘し、在日コリアンとしてのアイデンティティー探しの途上であった。日本で生まれながらも日本人ではなく、軍事独裁政権の祖国からは捨てられ、日本社会からは朝鮮人、朝鮮人部落に帰れと差別され排斥される存在、その歴史は知らされず、朝鮮語をはじめその文化は否定されるべきものとして刷り込まれ、「どうして朝鮮人として生んだのか!」と、ついにはその生みの親を怨むまでになっていた存在から、ありのまま無条件に、それも肯定的に受け入れるためにはそれ相応の作業と時間が必要であった。

夏季修養会を前に年間主題の提示を迫られていた中、教会全体の課題となっていた「民族主体性の確立に向けて」を掲げて臨むことになった。

在日大韓基督教会では、青年会、女性会などの自立した活動が許され、多くの教会で週に一回教会学校が開かれている意味と意義をとらえなおし、自身が経験したような自己の存在否定ではなく、だれもが君は愛されるため生まれたと感じられる人格形成の場として、またそのことを実現する教会形成をしていかなければとの強い思いがあった。

1971年に受洗、青年会活動に加え、教会学校教師と聖歌隊員を引き受けるなど、能動的に教会形成に参与するようになり今日に至っている。

全協OBに聞く

※8月号にも続きます。

すべては全協からはじまった

名古屋教会 李正子



わたしの全協ライフは89年に始まる。当時の全協は、指紋押捺拒否運動や、入管法廃止を求める「差別と闘う！」側面と、「(夏の修養会などで)楽しむ！」側面の二つがあった。主題には「十字架」や「解放」という言葉が入り、信仰と「在日」のアイデンティティーが主軸であった。また中央委員には地域での民族教育に携わっている先輩がいて、わたしも多くの影響を受けた。にもかかわらず、私自身も全協の活動を「信仰か、民族問題か」と問うたこともあった。

夏の修養会では、RAIKの佐藤信行先生や李清一牧師からKCCJの歴史に関する話や、荒井献先生のような高名な神学者から講義を聞いた。また後輩が中心になる頃には平良修牧師や堀江有里牧師を迎え、「在日」の枠から踏み出そうとする挑戦もあった。修養会のメインは主題講演と全協発題だが、一日目の最後のプログラムとして、車座になって自己紹介をする交流会も忘れがたい。当時の先輩はウリマルで歌を歌っていた。個性豊かな先輩方をあげればキリがないが、その中でも松田聖子の「渚のバルコニー」をウリマルで歌っていた先輩が印象的だった。

わたしは全協を通して「光州」を知り、朝鮮学校という「ウリハッキョ」を知り、日本社会の語られない歴史を知り、朝鮮半島の統一に関心をもった。だからLGBTQや、日本軍「慰安婦」、済州43事件についても知りたいと思うようになった。全協のおかげで新しい扉が開かれ、その扉の向こうで忘れ去られている人たちが、その只中で働くイエスの志を継ぐ人々に会うことができた。だからその過程を共に歩んだ全協の先輩、友人、後輩は何にも変えがたい。

あのときの全協は、国籍はどうあれ、詳細な背景はどうあれ、永住権の種類がどうあれ、「朝鮮半島にルーツを持つキリスト者青年たち」の集まりだった。隔世の感を禁じ得ない。だからこそ、今、より豊かにされたKCCJの可能性を考えたい。

信仰も全協の仲間とともに鍛え

大阪教会 金成元



私が、全協活動に関わっていた1970年代は、在日同胞に対する制度的・社会的差別がまだまだ深刻で、また、韓国の政治状況も軍事独裁政権による厳しい人権抑圧が問題となっていた。日本社会で生活する中で、全協に集う仲間たちは、民族差別によって進学や就職などで壁にぶち当たり、自己実現のためにもがき苦しんでいた。韓国での人権状況は学生や労働者にとどまらず、民主主義を求めて行動したキリスト教の指導者や青年が逮捕投獄されていた。こういった状況の中で、信仰とは何か、教会とは何かという問いは、常に私たちの中にあっただと思う。自分たちが信仰生活を続けることによっていわゆる救いにあずかること、教会は青年を含む信徒に救いの場を提供する事が私たちが在日大韓基督教会の目的となって、教会が

社会や在日同胞の現実からかけ離れた存在になっていないかという問いであった。

当時、私たちが全協の標語などによく使っていた言葉は、「キリスト者の社会責任」であった。在日同胞の青年が退去強制という名で国外追放されそうになっている問題、納税などの義務は課せられているのに教育や福祉の恩恵にあずかれない問題などに対する取り組み、韓国で民主主義を求めて拘束されたキリスト者、民主人士の釈放を求める活動等、小さい力ではあったがこれらの課題に取り組んできたと思う。

まもなく70歳になろうとする今、当時を振り返ってみると、ずいぶん無茶をしたと思えることもあるが、青年時代にこういった取り組みをしたことによって、私の信仰も全協の仲間とともに鍛えられていったのではないかと思う。

わたしの全協

京都教会 尹日鉉



私の全協活動は1979年に高校生修養会(@野尻湖レイクハウス)に参加し関西地方をはじめ全国の青年たちと出会ったことに始まります。そこでは先輩である青年たちが密度の高いコミュニケーションを高校生たちにも求め「オルグ」と呼ばれる青年会全協への誘いが積極的に行われました。

先輩たちの導きにより1980年代にはいつから95年まで携わりました。80年という本国では民主化運動、在日同胞社会では指紋押捺拒否運動をはじめとする権利保障と社会運動、法的地位にいたるまで私たちの問題がおおく掛かってきた時期でした。これらは全協青年たちにとっても避けることのできない大きなイシューとして捉えられました。

一方、教会青年が、福音の宣教や伝道することを差し置いてそういった社会的な問題にばかり取り組むことはいかがなものか、といった選択と葛藤が問われた時でもありました。そういった状況のもと二世・三世在日同胞としてのアイデンティティーの問題に直面する青年たちは、教会に集い青年と出会うことを希求したのでした。職場や学校では出会うことができない同胞の友人が教会青年会には居る。自らの迷いや悩みを分かち合ってくれる仲間に出会いたい。信仰が増し加えられることはもとより、この世をどのように生きてゆくか、在日という状況におかれたキリスト者としての自分たちは何を求めるのかを仲間と一緒に祈り、求め続けたのでした。

当時関西地方会が西部地方と分立する時期にあり、私たちは全国聖書キャラバンを企画し西部地方会の青年たちに逢いに行きました。また、全協活動をより強くするために、「百名修養会」を目標に掲げとにかく一人でも多い教会青年たちと繋がりを持つと努めました。結果120名を超える夏季修養会を持つことが出来ました。

KCCJには「勉勵青年会」と呼ばれた歴史があります。教会の世代を担う主役はいうまでもなく青年です。青年たちが喜びを持って主に仕えることができますように。ワクワクして共にあつまる全協青年でありますように祈っています。Let us serve the Lord with joy and Fun to meet together.

おわりに、当時の全協の模様をZENKYO LOVE—WEBサイトで伺い知ることができます。ご参考までに<http://hwm6.wh.qit.ne.jp/smileyasmile6/>

ルツ結婚相談所

在日韓国人・帰化人、結婚・再婚を望んでいる人へ
年齢 23 歳～70 歳まで、北海道から九州まで

親身になってご成婚までねばり強くお世話を
させていただきます。お気軽にお電話ください。

090-3429-9707 代表 崔貞淑

韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

●B6版変型・1483ページ

●価格:2,500円(消費税・送料込み)

※お求めは総会事務所へ

KCCJ

UCCJと宣教協力委員会 2年ぶりにオンライン方式で開催

新型コロナウイルス感染症により、2020年には開催されなかった日本基督教団（以下UCCJ）と在日大韓基督教会（以下KCCJ）の宣教協力委員会が、今年第53回として6月15日（火）オンライン方式で行われた。

「両教会の宣教課題と宣教協力～コロナ禍における宣教～」という主題をもって行われた今回の委員会には、UCCJから10名、KCCJから10名が参加した。

それぞれの教団からの参加者紹介、報告などがあり、主題に沿って発題がなされた。

まず、KCCJからは許伯基牧師（京都南部教会）が、「KCCJのコロナ対策、課題など～教会の5大要素にちなんで」という題で、①コロナが礼拝に及ぼした影響、②コロナが交わりに及ぼした影響、③コロナがみ言葉の宣布に及ぼした影響、④コロナが奉仕に及ぼした影響、⑤コロナの体験を信仰的にどう消化

し証しするか、などについての発題をした。

UCCJからは春原禎光牧師（柏教会）が「コロナ禍での教会ネット・SNS利用」という題で、①礼拝、自宅から礼拝にネット参加、②交わり・学び、SNSの利用例、③伝道、教会もSNSをすべき時代、④今後の課題、などについて発題したのち、質疑応答を通してコロナを契機とした時代に挑戦すべき、直面する様々な課題を共有した。

最後に2021年度の「平和メッセージ」の草案について協議・採択し、それぞれの8月の機関紙に掲載することとした。



西部地方会

第37回定期総会を開催 新会長に梁榮友牧師を選出



西部地方会の第37回定期総会が、2021年5月30日、コロナ禍の影響によりzoomで開催され（進行場所：武庫川教会）、総代33名中29名が参加した。

開会礼拝では、会長の李重載牧師が「終末の時にどう向き合うべきなのか」（ペトロI4:7～11）という題で説教し、祝祷を李聖兩名誉牧師により執り行われた。

重要な報告や決定事項は以下の通り。

- 長老増員選出承認：武庫川教会、広島教会
- 無牧教会臨時堂会長選任の件承認：新居浜グレース（中江洋一牧師）、福山（李相徳牧師）、西宮、水島（尹鐘憲牧師）、姫路、姫路薬水（韓世一牧師）
- 姫路教会の臨時牧師である金永柱牧師への宣教支援の件を承認
- 西部地方会の規則改正の件を承認。
地方会定期総会の開催が困難となった場合のオンライン開催に関する改正の件と定期総会が召集出来ない時の臨時措置に関する地方会規則の改正の件
- 西部地方会の運営内規の訂正・修正および追加の件を承認。
- 2021年予算案：10,083,502円（内、前年度繰越金6,112,102円）
- 役員改選

会長：梁榮友牧師（武庫川）、副会長：韓承哲牧師（神戸東部）、林英宰長老（武庫川）、書記：韓世一牧師（神戸）、副書記：李相徳牧師（三次）、会計：白承豪長老（神戸）、副会計：梁昌熙長老（武庫川）、伝道部長：李重載牧師（川西）、教育部長：中

江洋一牧師（広島）、社会部長：尹鐘憲牧師（明石）、信徒部長：崔亨喆牧師（岡山）、考試部長：韓世一牧師（神戸）、視察部長：梁榮友牧師（武庫川）、宣教協力部長：梁榮友牧師（武庫川）、教役者会会長：李相徳牧師（三次）
（報告：韓世一牧師）

西南地方会

第71回定期総会を開催 新会長に金聖孝牧師を選出



第71回西南地方会定期総会は、2021年4月29日福岡教会で開催予定であったが、コロナ緊急事態宣言を受け、その代替を任職委員会で決定した。

(1)各報告・献議案事項の承認については書面で承認の可否を判断する。

(2)役員選挙は郵送で投票し選任する。

なお、選挙開票はオンラインで5月16日、6月13日に行い以下のように改選された。

会長：金聖孝牧師（熊本）、副会長：辛治善牧師（福岡中央）、高文局長老（別府）、書記：尹善博牧師（博多）、会計：崔允聖長老（福岡）が選任された。

また各部長には、伝道部長：金仁果牧師（福岡）、教育部長：朱文洪牧師（小倉）、社会部長：郭鏞吉牧師（沖縄）、青年部長：趙顯奎牧師（別府）、女性部長：李恵蘭牧師（地方会）、宣教協力部長：金成彦牧師（下関）、視察部長：朴榮喆牧師（対馬めぐみ）、考試部長：金聖孝牧師（熊本）、財政部長：崔允聖長老（福岡）が選任された。会計監査は朴在徳長老（沖縄）、金定明長老（宇部）が選任された。

献議案は、①福岡教会長老2名選挙許諾請願、②第71回期西南地方会予算案が承認された。
（報告：尹善博牧師）

マッキントッシュ牧師宣教記念集会開催 追悼20周年、今ひびくマッキントッシュ牧師の思い

麦仁道（ジョン・マッキントッシュ）牧師の召天20周年を覚えて、去る6月19日にオンラインにて記念集会が開催された。KCC、西南KCC、RAIK、全国女性会が力を合わせ、KCCJが主催するオンライン集会としては、130余名という最大規模のものとなった。

司会を金必順牧師、通訳をデビッド・マッキントッシュ氏が務め、日本の各地と韓国、カナダからの参加者が画面上に一堂に会している姿は感慨深いものがあった。

内容は、生涯をまとめたビデオ上映、グレン・デビス牧師のメッセージ、ゆかり深い8名によるコメント、4名の子息息女からのコメントなど盛りだくさんで、また、ベス師母の元気な姿を見られ

たのは望外の喜びである。

宣教活動や指紋押捺拒否運動などを共に担った世代、テニスなどをしながら愛されて育った世代、そして筆者のように直接触れる機会がなかった世代。すべての世代にとって、麦牧師は敬愛してやまない大きな存在だ。しかし、偉人として褒め称えるのは、故人の意にそぐわないだろう。「行って同じようにしなさい」と言われたイエスのように、その背中はずべての者に「あなたはどのようなのか」と問うているからである。
（報告：朴栄子牧師）

